第２部

第１１回 中学生長崎平和の旅

（都内平和関連施設バスツアー）

昭和館前にて（東京都千代田区）

参加生徒

板橋第一中学校　德田　彩絵	志村第四中学校　小倉　惇寛	桜川中学校　西村　明梨
板橋第二中学校　西野　里奈	志村第五中学校　井熊　明和音	赤塚第一中学校　小西　結子
板橋第三中学校　山内　孝晃	西台中学校　山内　凜音	赤塚第二中学校　和田　宝珠
板橋第五中学校　濱　美来	中台中学校　石川　丈	赤塚第三中学校　平松　亮人
加賀中学校　兵頭　正樹	上板橋第一中学校　内山　李穂	高島第一中学校　伊藤　里桜
志村第一中学校　齋藤　優空	上板橋第二中学校　鈴木　美穂	高島第二中学校　中村　美花
志村第二中学校　宮本　思温	上板橋第三中学校　三浦　恵茉	高島第三中学校　眞下　未華子
志村第三中学校　中島　香南		

引率者

志村第五中学校　関　一彦校長（団長）　蓮沼　圭教諭（指導員）　村前　聖菜教諭（指導員）

令和５年中学生長崎平和の旅　都内平和関連施設バスツアー行程表

月日・曜日	時　間	行　　程
8月30日 （水）	１２：００	板橋区役所　集合
	１２：００ １２：１０	受付、説明
	１２：１５ ～ １２：５５	板橋区役所　発 ※昼食 昭和館　着
	１３：００ ～ １３：５５	昭和館　見学 （〒１０２－００７４　東京都千代田区九段南１－６－１）
	１４：００ ～ １４：２５	昭和館　発 平和祈念展示資料館　着
	１４：３０ ～ １６：２５	平和祈念展示資料館　見学 （〒１６３－０２３３　東京都新宿区西新宿２－６－１ 新宿住友ビル３３階）
	１６：３０ ～ １７：００	平和祈念展示資料館　発 板橋区役所　着
	１７：００ ～ １７：１５	板橋区役所　解散

伝え繋ぐことの大切さ

第11回中学生長崎平和の旅
団長　関　一彦
（志村第五中学校長）

先の戦争からすでに７８年が経過し、平和な社会が当たり前のような生活を送っている私達にとって、今この瞬間にも世界では、戦争に巻き込まれ、亡くなる人、大けがを負う人、食べるものもなく、生きることそのものが危ない人が数多くいるということを、報道で知ることはできても、実感をもって受け止めることは難しいと感じます。

７８年前、日本の長崎の地に、原子爆弾が投下されたことで、どれほど恐ろしいことが起こっていたかを、台風６号の接近で現地に赴き、直接被爆者の方々からお話を伺うことはできませんでしたが、ライブ配信の被爆７８周年長崎原爆犠牲者慰霊平和記念式典に参列することで、２２名の生徒たちは戦争の悲惨さと平和の尊さについて実感をもって受け止め、改めて自分たちの使命を強く感じることができたことと思います。また、「戦争は絶対に起こしてはならない」「長崎を最後の被爆地に」という先人の強い願いを、決して風化させてはいけないと、生徒たちは深く心に刻むことができたとも思っています。

さて、板橋区は、１９８５（昭和６０年）年1月１日に「平和都市宣言」を行いました。その後、１９９２年に、広島市の「平和の灯」と長崎市の「誓いの火」から採火した灯を合わせ、板橋区平和公園内にある平和の灯モニュメントと区役所本庁舎１階の壁面に設置した灯火台で「平和の灯」としてともし続けています。そして、戦後５０年にあたる１９９５年から区立中学校の代表を被爆地に派遣する「中学生広島平和の旅」事業を、２０１１年からは長崎の平和祈念式典に参加する「中学生長崎平和の旅」事業を実施し、長崎平和の旅は、今回第１１回となります。平和の旅の目的は、次世代を担う子供たちに戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えることです。今回現地での学習はできませんでしたが、学習会の中でグループごとに平和への思いを深め、１１月１日の「平和のつどい」での発表、そして各中学校での文化祭などでの発表で、戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えます。しかしそれで終わりではなく、今後大人になっても、広く周囲の人たちに伝える平和の伝承者となることを強く期待します。派遣生一人一人が平和への強い思いを語り繋ぐことができれば、板橋だけでなく、唯一の被爆国である日本の、そして世界の平和な社会構築に貢献することができます。誰にとっても幸せな社会、地球となるよう伝えていってほしいです。

最後に、長崎原爆犠牲者慰霊平和記念式典　鈴木史朗長崎市長の「長崎平和宣言」の中の１６歳で被爆した谷口稜曄さんのことばを紹介します。「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」

平和への願い

板橋第一中学校　８年　徳田　彩絵

７８年前の８月６日午前８時１５分広島、８月９日午前１１時０２分長崎にアメリカ合衆国によって原子爆弾が投下されました。日本人なら誰もが知っているだろう事実。何年何十年経ったとしても変わることない歴史、色褪せず被爆者の記憶に残り続ける恐怖。そして被爆者の皆が口を揃え訴え続ける平和の尊さ。被爆者の平均年齢は８５歳を超え段々と減少して行く中、今なお後遺症で苦しまれる方がいる原爆の恐ろしさ、そして戦争の悲惨さを学び、向き合い、伝える。そんな機会となりました。

「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるように見えます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」これは１６歳で被爆し、背中に真っ赤な大火傷を負った谷口稜曄さんが生前に遺した言葉であり、長崎平和式典で長崎市長が長崎平和宣言の際に引用した言葉です。現在、ロシアによるウクライナ侵攻が行われており、より一層身近に感じる戦争。ロシアは核保有国であり今後使用する可能性も少なくはありません。持っていてもきっと使われることはないであろう核兵器の存在。今、本当に核兵器への意識はそう在っていいものなのか、と考えさせられます。現在世界には13,000発を超える核兵器が存在しています。そのうちの 4,000 発程がすぐに使用可能なものといわれています。核兵器を持つ理由として諸問題を解決する外交カードになる、近隣諸国への絶大な影響力行使に繋がるといった核兵器による抑止力を働かせることが主な目的とされています。核兵器を使わないと成り立たない社会は持続可能な社会なのでしょうか？「長崎を最後の被爆地に」式典の最中何度も唱えるように繰り返された言葉。被爆者減少に比例するように減っていく人々の原爆への知識は、日本から、世界から、絶対に絶やしてはいけないものであると私は思います。原爆について語り継ぐ者がいなくなった時、私はすぐにでも各国で開発が行われ、実用されるのではないかと思います。被爆者の願いと共に、一歩を踏み留まらせる原爆の悍ましさは声にして発信し続けなければならないと思います。「三度目は許してはならない」世界唯一の被爆国である日本人として、私達は原爆の恐ろしさを後世に伝え続けなければいけないのだと、この長崎平和の旅を通し身に染みて感じました。

誰にも勝ちがない戦争、一瞬にして数多くの尊い命を無差別に奪い、未来さえも奪ってしまうそんな戦争がこの世から一秒でも早く無くなってほしい。今回の貴重な体験を一人でも多くの人に発信し、被爆者の願いが叶う未来が一秒でも早く訪れることを望んでいます。

平和について考えて

板橋第二中学校　８年　西野　里奈

1945 年 8 月 9 日 11 時 2 分、長崎に原爆が投下されました。この攻撃により長崎の市街や人々の生活は何が起きたのかわからないうちに奪われました。攻撃は一瞬でしたが、原爆症の痛みや家族、友達、知り合いを失った悲しみは原爆投下から 78 年たった今でも続いています。世界は平和に少しずつ近付いていると思っていましたが、2022 年ロシアのウクライナ侵攻が始まり平和からは遠くなってしまいました。

【調べ学習をして】

今まであまり調べることがなかった原爆投下について調べ、長崎の原爆『ファットマン』の恐ろしさを学びました。この攻撃で長崎の景色は一瞬にして奪われてしまいます。爆発時のエネルギーは、約 30 秒で 3,000 メートル上空に原子雲を立ち昇らせるほどの巨大なエネルギーでした。この原子雲は遠くから見ても見えるほど大きかったのかもしれないと思いました。原爆により、14 万 8793 人が死傷しました。当時の長崎の人口は約 24 万人だったので、半分以上の人が原爆の被害を受けました。また、長崎の建物も大きな被害を受けました。原爆投下による被害は私たちには想像できないほどに大きい被害だったのです。

【平和祈念式典】

今年は台風の影響により長崎平和祈念式典は室内で行われました。そのため、現地にはいけませんでしたが、放映を通して大切なことが学べました。長崎平和宣言で、生前谷口稜曄さんの語った体験が話されました。その話の中には「突然、背後から虹のような光が目に映り、強烈な爆風で吹き飛ばされ、道路に叩きつけられました。背中に手を当てると、着ていた物は何もなく、ヌルヌルと焼けただれた皮膚がべっとり付いてきました。」とありました。このような体験をすることになるとは長崎の誰もが考えていなかったことでしょう。そして、私は、このような体験をすることがない平和な世界を作らなければいけないと強く思いました。長崎平和宣言には「長崎を最後の被爆地に」という言葉もありました。私達は日本に投下された原爆の恐ろしさをこの先何世代後の人にも伝えていかなければいけない、伝えるべきと感じました。

【感想】

私は今回の学習を通して平和は当たり前ではないことに改めて気付かされました。そして、これから先も原爆について学ぶ機会を自ら作り、伝えていくことで未来の平和に近付けると思いました。

「新しい抑止力」

板橋第三中学校　８年　山内　孝晃

１９４５年８月９日長崎に一発の原子爆弾が落とされました。一瞬にして凄まじい爆風、異様な轟音、熱線が発生し多くの人が亡くなり、苦しみました。

私達は台風の影響で、長崎に足を運び原爆に関する資料を見ることはできませんでしたが、都内の平和資料館を訪れたり、ＯＮＬＩＮＥ配信で長崎平和式典と築城昭平さんのお話を視聴したりすることで、原爆が投下された広島、長崎のことを「恐ろしい、酷い」の一言だけでは片付けられなくなりました。「バーン！ガガガガガーンという音がいきなりして、本当に地獄に来たのかと思った。」当時１８歳だった築城明平さんは動画の中で、このようなことをおっしゃっていました。築城さんは運良く原爆による熱線を浴びなかったため、身体的なダメージは少なかったそうですが、その後の後遺症に苦しんだそうです。原爆投下から数日経った頃、急に４０度の熱を出し嘔吐、下痢、血を吐く、髪の毛が抜けるなどといった当時の医学の知識では対応しきれない病にかかってしまい、周りの人たちからは「これは死ぬぞ」と恐れられ、最後には家族にも諦めかけられたそうです。聞いているだけで胸が痛くなるような、辛い実体験をお話しされていました。これを聞き、原爆は一瞬で多くの命を奪うだけでなく、未来への生きる希望を失ってしまう兵器だということを改めて実感しました。

また、平和記念式典を見てとても心に響いた言葉があります。それは長崎市の鈴木市長がおっしゃっていた言葉です。【核兵器を持つことで自国の安全を守るいわゆる、「核抑止」に依存してはならない。当時被爆した方々が思い出すだけで辛いはずなのに、核兵器が非人道的な兵器であることを世界に訴え続けてきた。この訴えこそが７８年間核兵器を使わせなかった「抑止力」なのではないか】この言葉を聞き、自分が今していることはただの”課題”の発信ではなく、世界中の国々、”世界中の方々が知るべき課題”の発信であり、それが「抑止力」につながるのだと思いました。

今もなおロシアはウクライナの領土で戦争をしています。しかし一年半前に始まった戦争がなかなか終わらず、ロシアは核兵器での脅しをかけています。私は核兵器を持つことには反対です。国防のために兵器を持たないといけないという気持ちもわかりますが、核戦争が始まった途端、世界中を巻き込む取り返しのつかないことになりかねません。そのため鈴木市長がおっしゃっていた「抑止力」を多くの人たちが持てるようになり、戦争、原爆の悲惨さをより多くの後世に伝えていくことが核兵器を使わせない、なくすための最善の方法だと私も思います。

私は長崎平和の旅の一員として、原爆の悲惨さを多くの人に伝えて、それがいつか新たな「抑止力」となるようにしていきたいと思います。

時が経っても、忘れてはならない

板橋第五中学校　８年　濱　美来

長崎に原爆が投下されてから、78 年が経ちました。

平和であることは決して当たり前ではなく、78 年前の日本では様々な尊い命が戦争によって失われました。

私達は長崎に行くことはできませんでしたが、平和記念式典の映像を見て、長崎市長の鈴木史朗さんの言葉の中に、谷口稜曄さんが語った体験で、「背後から虹のような光が目に映り、強烈な爆風で吹き飛ばされ道路に叩きつけられた。背中に手を当てると、着ていた服は何もなく、ヌルヌルと焼けただれた皮膚がべっとりとついていました。三年七ヶ月の病院生活のうちの一年九ヶ月は背中一面大火傷のためうつ伏せのままで死の淵をさまよいました。私の胸は床ずれで骨まで腐り、胸は深くえぐり取ったようになり、助骨の間から心臓が動いているのが見えます。」という言葉にとても驚きました。谷口さんは六年前にこの世を去りましたが、原爆で負った傷は消えることなく残り続け、生涯谷口さんを苦しめ続けたものだと思います。私はたった一発の爆弾によって沢山の人々の命、人生を奪い、原爆によって消えることない深い傷を負わせた戦争の残酷さと、消えるべきでない命を一瞬にして消してしまったことは、決して忘れてはいけない過去であり、これからも次の世代へ伝えていくべき事だと思います。

今でも戦争体験者は年々減少していき、今の私達の時代の若者は戦争離れだと言われています。今や戦争を知らない、知ろうとしない人が世界にはたくさんいると思います。

今の日本は、世界は、戦争から離れて行き本当にこのままで良いのでしょうか。私は疑問に思います。やってはいけない、もう二度と起こらないようにするためには、全ての人に、戦争という恐ろしさを知る必要があり、これから先も伝え続けることが重要だと思います。私は、少しでも世界が平和になるためには何をするべきなのか、今回の長崎平和の旅という体験は私の中でもっとも過去を振り返る重要さと、伝えていくべきことは何なのかを考えることができました。まだ、世界には核兵器があり、核抑止という理由で、核保有国が増え続けています。また戦争が起こってしまうかもしれません。

世界は、戦争を起こしてしまったという、過去の出来事に背を向けるのではなく、もう一度振り返ることが大切だと強く思いました。

平和記念式典を通して

加賀中学校　８年　兵頭　正樹

1945年８月９日午前11時２分、米軍機「ボックスカー」号によって原子爆弾『ファットマン』が長崎市の街とそこに住んでいる人々の生命を一瞬にして破壊しました。その原爆の被害の大きさを詳しく知り、他の人々に伝えるために今回長崎平和の旅に参加することにしました。残念なことに長崎に急接近した台風６号の影響で、長崎平和の旅は実現しませんでした。しかし、先生方の御配慮により８月９日の平和記念式典を長崎に行くはずだった仲間と一緒にＯＮＬＩＮＥ配信で参加することができました。また、８月３０日には、長崎平和の旅の代替えとして都内平和関連施設のバスツアーを実施していただくこととになり、戦争関連の展示施設に行き戦争体験者からお話を伺うことができました。

私は、長崎平和記念式典の中で長崎市長がおっしゃった言葉で心に残った言葉は二つあります。

一つは『「今、核戦争が始まったら、地球に、人類にどんなことが起こるのか」という根源的な問いに向き合うべきです』という言葉です。この言葉を聞いたとき私は、もし今、核兵器が日本に落とされたらどれほどの被害が起こるのかと頭の中で考えていました。人類史上最も威力のある核爆弾『ツァーリ・ボンバ』のその威力は、約50000キロトンで、長崎に落とされた原爆『ファットマン』の約2380倍で、日本にもし投下されてしまうと、日本が半壊するほどです。そんな核爆弾があると考えただけで、恐怖を覚えます。そんな中、核兵器を使って他の国を威嚇するという理由で核を保有している国が多いということを知り、だからこそ原爆の被害を伝えていき、核廃絶を実現したいと思いました。

二つは、「被爆者は、思い出すのも辛い自らの被爆体験を語ることで、核兵器がいかに非人道的な兵器であるのかを世界に訴え続けてきました。この訴えこそが、78年間、核兵器を使わせなかった「抑止力」となってきたのではないでしょうか。」という言葉です。確かに、被爆者が思い出すことも辛いと思っていることを伝えてきていただいたおかげで、長崎以降核兵器が落とされてこなかったのではないかと思いました。私は、被爆者の方がおっしゃったことを一つも漏らすこともなく、他の人に伝えていき「長崎市を最後の被爆地」にするという意志で、微力だけど無力ではない私達が、平和のバトンを繋いでいきたいと思いました。

伝える

志村第一中学校　８年　齋藤　優空

「長崎を最後の被爆地に。」これは、長崎市長の鈴木史郎氏が平和記念式典で世界に発信した言葉です。

1945年8月9日午前11時2分、原子爆弾により数えきれないほどの命が奪われました。78年経った今でも、全身に火傷を負ったまま生きている人がいます。家族や友達を失い、心身ともに傷つけられている人がいます。被爆者の平均年齢が85歳を超え、原爆の恐ろしさを身をもって体験した人が少なくなっていく中、この惨禍を二度と繰り返さないために、今、私たちには何ができるのでしょうか。最も大切なのは、「被爆の実相を伝える」ことだと感じました。私たちが「原爆は恐ろしいもの」「戦争は決して起こってはいけないもの」だと理解できているのは、原爆や戦争に関する知識をもっているからです。そして、実際に被害に遭ったわけではない私たちが、それらの知識をもっているのは、実際に被爆した方、またはその方の子供の、いわゆる「被爆二世」の方々が語り部となって、当時の状況を伝えていただいているからです。しかし被爆者が年々亡くなり、語り部が少なくなっていく中、もしこの先、実際に体験談を伺う機会がなくなってしまったら。未来の子どもたちは原爆についての知識がなくなり、戦争への興味・関心すらもたなくなってしまうかもしれません。そのような人達が増えていけば、いずれ「長崎を最後の被爆地に」は実現できなくなってしまいます。

この先の未来を今よりも平和な世の中にするためには、自分から語り部となり「被爆の実相を伝える」ことが大切です。家族や友達、身近な人に一人でも多く原爆について知ってもらう。それをさらに他の人に伝えることで、後世にも戦争について考える人が増えます。平和を実現するためには、どんな状況、時代においても平和の尊さを忘れないことが大切なのではないでしょうか。そして自分から情報を発信するためには、原爆について理解することが必要不可欠です。実際に現地に行ったり、本を読んだりして知識を得ることで初めて、周りの人に伝えることができます。原爆や戦争は一言で語れるほど単純なものではありません。一度調べただけですべてを理解することは難しいでしょう。しかし、「調べる」ことに意味があります。「少しだけでもわかったことがある」と言えることが大事なのだと思います。

現在、ロシアによるウクライナ侵攻が長期化しており、世界の一部で平和が少しずつ崩れていることを実感することが増えてきました。いつ世界大戦が起こってもおかしくない状況にある中で、現代を生きている人、そして、これから生まれてくるすべての人の平和と幸せを守るために「被爆の実相を知り、伝える」ことで、私たちで世界を守っていきたいです。

平和記念式典を観て

志村第二中学校　８年　宮本 思温

今年の長崎平和の旅は中止になってしまったので、私達が現地に行き実際に平和記念式典に参加したり、被爆者の方の話を聞いたりすることができませんでした。そのため、８月９日の平和式典の中継を観るまでは原子爆弾や戦争について、少し昔に起きたものという印象が強く、自分にとって身近なものという感じがあまりしませんでした。しかし、平和記念式典の中継で被爆者の方や長崎市長、総理などが話しているのを観て、長崎や広島で起こったことはそんなに昔のことではなく、自分たちにとっても身近なものだと思いました。

私は今年の長崎平和記念式典を観て印象に強く残ったことが２つあります。

１つは、長崎市長が長崎平和宣言のときに話した16歳で被爆した谷口稜曄さんの遺言である「忘却を恐れます」という言葉です。谷口さんは６年前に亡くなっており、被爆者の平均年齢も85歳を超え、人々が原爆の恐ろしさや、それによって起こされた惨劇を忘れている今のことを言っているようで、心に響きました。この言葉を聞き私は、私達の世代がもっと戦争や原爆などに関心をもって、調べ、得た知識や情報と、被爆者の方から聞いた話などを後世に伝えていくことが大切であり、今の私達にもできることだと考えました。

２つは、長崎に原爆が投下された年だけで、7万4000人も亡くなってしまい、生き延びても放射線の影響でがんや白血病になってしまうことがあるということです。その年に亡くなった方だけでも人数がすぐに想像できないくらい多く、私はとても驚き、原子爆弾がどれほど危険で恐ろしいものだと改めて感じ、二度と原子爆弾を使用してはいけないと思いました。しかも世界には原子爆弾が１万2500発以上も存在すると知り、自衛のためでも原爆は所持してはいけないし、核の傘に入ることも自分が持ってないけれど、結局核の力に頼っていることなので、世界中の原子爆弾が全てなくならないと決して平和にはならないと考えました。今年の平和記念式典を観て私は、広島・長崎の悲劇を二度と繰り返さないために一人一人が過去の出来事を知り、伝えていくだけでなく、今の世界の核の保有状況についても知ろうとすることで、世界中から原子爆弾がなくなっていくと考えました。

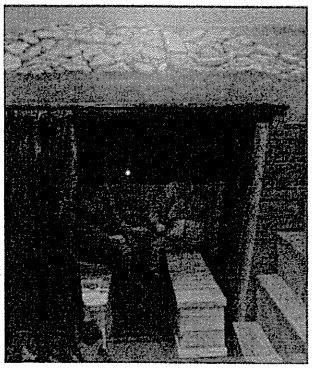
長崎に行くことができなかったのは残念ですが、平和の旅に参加していなかったら、こんなに原子爆弾や戦争、平和について考えたり、平和記念式典を観たりしなかったと思うので、長崎平和の旅に参加してよかったです。

私たちにできること

志村第三中学校　８年　中島　香南

私たちは、台風により長崎に行けずとても残念でした。しかし、ＯＮＬＩＮＥで式典に参加したり、都内の平和関連施設を見学したりしたことで平和について考えることができました。

平和祈念式典で、長崎市長の鈴木史朗氏は「今、核戦争が始まったら、地球に、人類にどんなことが起きるのか」という根源的な問いに向き合うべきだと力強く話していました。また、核兵器を使わせない本当の意味での「抑止力」をこれからももち続け、そして核兵器を廃絶できるかは、私たち一人一人の行動にかかっていること、そのために被爆地を訪れ、核兵器による結末を自分の目で見て、感じてほしい、被爆者の体験に耳を傾けてほしいということを強く訴えていました。これらの言葉に私は心を動かされ、私も自分にできることをしなければならないと強く感じました。



都内の施設見学で印象に残ったのは、昭和館で再現された防空壕の中に入ることができる体験です。今まで防空壕という言葉は聞いたことがありましたが、実際に再現されたものを見るのは初めてでした。なんとか４人入ることができそうな広さで思っていたよりとても狭く、真っ暗でした。空襲のサイレンや爆弾が落ちた地響きのような音を、狭く暗い防空壕の中で聴くのは、とても怖く恐ろしく感じました。当時は本当に爆弾が落ちてくるという恐怖の中で避難していたと思うと、さらに恐ろしく思いました。また、食糧や衣料不足などにより、戦争中はもちろん、終戦後も苦しい生活が続いていたことを知り、胸が苦しくなりました。戦争は絶対に繰り返してはならない、平和を守っていかなければならないと、より強く思いました。

今回私たちは、戦争や原爆の現実や悲惨さを知り、平和について学び、考えることができました。戦争を繰り返さず、核兵器のない平和をつくるために私たちにできることは、それらを伝えていくことです。学んだことや考えたことは周りの人に発信し、多くの人に戦争や原爆の悲惨さなどを知ってほしいと思います。

また学習する中で、長崎や広島を訪れたいとさらに強く思いました。それは、やはり被爆地に行かないと得られないものや感じられないことが多くあると思うからです。今後、被爆地を訪れ、被爆の現実をこの目で見て、被爆者などの話をこの耳で聞くことで、それらを感じたいです。そしてさらに平和について考え、より多くの人により強く伝えていけるようにしたと思います。

平和と伝承

志村第四中学校　８年　小倉 惇寛

原爆は怖い、威力はTNT120万トンと等しい。これを伝えることが原爆の全てなのでしょうか。原爆投下が忘却されつつある今だからこそ、これを問うべきであると私は思います。

「伝承とはなにか。」

数値を、被害を知って学び、原爆は怖いと思うことだけが、原爆学習ではないと私は思います。なぜなら、想像で終わってしまうからです。例えば、長崎にはファットマンが投下され、爆薬約21キロトンに相当しました。このような事実を伝えられても、戦争を経験したことのない私達には、到底理解などできず、想像で終わらせるでしょう。本当に大切なことは、戦争遺跡から肌で学び、体験を伝えることです。私は８歳の頃広島を訪れたことがあります。その時、唯一覚えていることが原爆ドームを見たことです。その頃の私に原爆を理解することはまだ難しかったのですが、無惨な姿で建っていたことへの衝撃はこれからも忘れません。戦争遺跡を見ることは、原爆の理解へつながります。そして現在、被爆者のお話を聞くことが難しくなっています。なぜなら、高齢化が進んでいるからです。私の曾祖母と曽祖父は、戦争を経験したことがあります。曽祖父は日本から遠く離れた地で若く戦死しました。曾祖母はまだ幼かった祖父を抱え、引揚げを経験しました。そして、曾祖母を亡くした今を振り返れば、話を聞く機会はたくさんあった筈です。しかし、戦争の話を聞くことが怖くて拒んだ自分を非常に後悔しています。そして、長崎平和の旅の代替として訪れた平和祈念展示資料館では引揚げを体験した語り部さんのお話を聞くことができました。引揚げ船ではロシアの魚雷から攻撃され、留萌になんとか到着しました。しかし、港で架けられた渡り板が不安定で何度も落ちたそうです。シベリア抑留では、食料が乏しいうえ、過酷な労働をさせられていました。そのため、飢えや栄養失調によって亡くなる兵士が多かったです。お腹を空かせていた兵士は、時計などの所持品や、手作りのスプーンを食料と交換しました。そして戦友が亡くなっても、雪で硬いため完全に埋葬してあげることができませんでした。このような酷い時代があって今の私達が存在しています。この苦労や体験を忘れてはなりません。

世界では、戦争や紛争をしている国があります。そして、あろうことか核を脅しに使っている国もあります。78年前の悲劇がもう一度繰り返される危機にあるのです。これは、核の認識が薄くなってきた証拠と言えるでしょう。戦争が遠いものとなって風化されてはいけません。今を平和に生きていることに感謝して過ごそうと、改めて感じた貴重な学習となりました。

対決ではなく対話で

志村第五中学校　８年　井熊　明和音

1945年８月９日午前11時２分、ピカッとあたり一面が光りその瞬間爆風と強烈な熱線が、人を、街を、一瞬にして破壊しました。

私は今回台風により被爆地の長崎に行くことはできませんでしたが、平和記念式典や被爆者の方のお話を動画で見て、改めて自分自身の考えを深めることができました。特に、長崎平和推進協会の方があげてくださっている動画で見た被爆者の方のお話では、多数の方が「あの日は朝から空襲警報がなっていた。たくさんの人が防空壕の中に避難していたが空襲警報が解除され外にでて安心したかと思ったら原子爆弾が落ちた」とおっしゃっていました。私はこの話を聞き、解除されても防空壕の中に留まっていれば、亡くなる方、負傷する方が多少でも減っていたのではと考えると、胸が痛くなりました。

爆心地からおよそ西へ500mの長崎市立城山国民学校は、建物自体は残りましたが人が入れる状況ではなく、在籍約1500人のうち約1400人が家庭で亡くなったと推定されています。このように原子爆弾は沢山の人や動物、植物などの尊い命、明るい笑顔、希望、未来、建物、街を一瞬で壊してしまいます。それがどれだけ苦しく恐ろしいことなのか、実際体験していない私達にもわかってしまう。これが戦争の一番恐怖を覚える点だと思います。

戦争というものは決して他人事ではありません。今現在もロシアによるウクライナ侵攻が１年以上続いています。長崎を最後の被爆地にするために今こそ平和を訴えるべきなのではないでしょうか。長崎に落とされたのを最後に、原子爆弾が使用されていないのは原爆の恐ろしさと脅威を実際に体験し知っている人がいるからです。ですが現在の被爆者の方の平均年齢は85歳を超え、その方たちがいなくなる未来を迎えようとしています。この事実から逃れることはできません。だからこそ人類共通の遺産である被爆者の体験に耳を傾けるべきです。今の時代SNSなどで簡単に様々なことが拡散できます。憶測をよぶ情報、誹謗中傷などに使用するのではなくこの戦争の記憶を無くさないために活用すべきです。周りの人に、次の世代に伝えることが未来の在り方を左右するのではないでしょうか。そして伝えることは、この貴重な体験をすることができた私達の使命でもあります。

最後になりますが私は戦争などの対決ではなく、対話することによって、核抑止への依存からの脱却、核兵器廃絶の道が開かれると考えます。

長崎を最後の被爆地に

西台中学校　８年　山内　凜音

「私は忘却を恐れます。」これは被爆者である谷口稜曄さんの言葉です。過去の苦しみを忘れ去られつつある現代で、私達は何をしなければならないのか、次世代にどう伝えていくべきか、ということを改めて考えさせられる言葉でした。

現在の被爆者の方々の平均年齢は８５歳を上回っています。実際に被爆者の方の体験を聞き、行動を起こせるのは私達の世代が最後かもしれません。

非核兵器保有国である日本は核兵器廃絶に向けた取り組みを全面的に行っています。その反面、核保有国であるアメリカの核抑止力に頼っている面もあります。日本はその抑止力という傘に入り込み、自身の安全を守っているというのが現状です。

なぜ、日本は核兵器廃絶のための取り組みをしながらも核抑止力に頼ってしまうのか。それは、世界に核兵器というものが存在するからです。

ロシアによるウクライナへの侵攻が長期化する中、他の核保有国でも核兵器への依存を強める動きがあり、核戦争への危機が高まっています。そのなかで、国際連合事務総長であるアントニオ・グテーレス氏は「核兵器保有国が、核戦争の可能性を認めることは、断じて許容できません」と述べています。私は、この言葉から抑止力として核を持つという考えが誤っていると思いました。また、全世界共通で核を作らない、持たないという意識を広めていく必要があると思いました。唯一の被爆国である日本が、原爆の悲惨さ、恐ろしさを世界に発信し続けていかなければいけない、それこそが本当の意味での抑止力であり、これ以上同じ経験を繰り返さないための唯一の方法です。

私達は、戦争を直接経験したことがありません。しかし、今回学習していく中で、核兵器を廃絶するためには、日本が行動を起こすことが必要不可欠であるということに気付きました。被爆者や被爆二世の方々は今も世界に訴える活動を続けています。未来の子供に同じ経験をさせないために、長崎を最後の被爆地にするために、まずは日本が被爆者の方の体験を伝えていかなければなりません。私達は今こそ、その第一歩を踏み出し『核のない世界』をつくりあげていくべきです。

連鎖

中台中学校　８年　石川　丈

平和を願うこと、核兵器廃絶を願うこと。これは誰にだってできます。

今の平和な生活が続いてほしい、もう二度と戦争は起こしたくない。これはみなさん思っていることでしょう。願うことや思うことからもう一歩、伝えること、これが平和へ近づける大きな鍵となります。きっかけを作り出せば、発言は連鎖していきます。

step by step、誰かが願う→誰かが発言をする、誰かが誰かに伝える→誰かの心に留まる→世界が平和へと近付いていく。この『平和のバトン』のきっかけをつくろうとは思いませんか？このバトンをつなげて未来へ残そうとは思いませんか？

この平和のバトンという言葉は、平和祈念式典で長崎市長が何度も口にしていた言葉です。言葉では言い表しにくい行動の連鎖のことをバトンに見立てる。私はこの言葉が心に残り、衝撃を受けました。今年はあいにく、台風で実際に長崎に行って聞くということはできませんでしたが、画面一枚を通して平和祈念式典に参列し、たくさんの学びや発見を得ることができました。今年、思い出すことの辛いような悲劇を語ってくださっていた被爆者の方々の平均年齢は85歳を超えました。この貴重な話を聞けるのもそう長くはない、そう考えると更に未来を担っていく私たちが核兵器廃絶と世界恒久平和について発信していくことの使命を感じました。自分ひとりだったら小さな力かもしれませんが、平和のバトンを繋いで行く、この考え方から見れば、原点さえ作れればいずれ大きくなって、未来へ受け継がれていくのです。

ここで気付いた使命感を友達に伝え、平和の尊さについて深めていく、これだけでもきっかけにはなります。お互いに共感を得たり、お互いに対話したりすることで自分の思い描いている平和な未来につながるかもしれない、核兵器廃絶に近付くかもしれないと考えると更に平和のバトンの大切さを感じました。

私は被爆者の方が望んでいる未来にするために行動を起こそうと思った、この原動力が受け継いだバトンだと考えてこれから学校での発表を行う際に、この『平和のバトン』と言う言葉をキャッチワードに自分達にできることを伝えていこうと思いました。もしこの文章を読んで少しでも浮かんだことがあるのならば、それを伝えていくこと、それが世界を変えていく原動力となるかもしれません。

原爆の恐ろしさを伝える

上板橋第一中学校　８年　内山　李穂

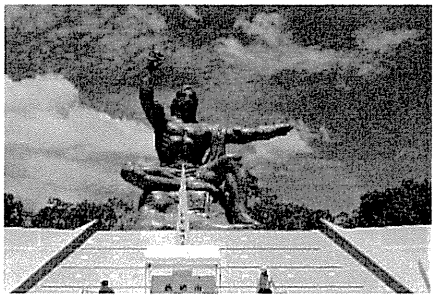
長崎に投下された原爆は罪なき多くの人々を死へ葬り去り、すべてを無にしました。そんな悲惨な出来事から78年。被爆者の人数も年々減少し、実際にあったことを伝えるのが難しくなってきています。私は今回現地に訪れて学ぶことはできませんでしたが、長崎に投下された原爆や被害の状況、こんなにも悲惨な出来事を二度と繰り返さないための取り組みなどを、資料や当日中継配信されていた平和祈念式典を観たりして学びを深めることができました。

原爆によって亡くなった人は73,884人。全焼または全壊した建物は約12,900棟にのぼります。長崎市内は一瞬にして焼け野原と化し、生き残った人でも全身大火傷や何かの破片が身体中に刺さるなど、まさに地獄のような光景だったと多くの被爆者が語っています。本来はあってはいけない核による攻撃。日本は唯一の被爆国となり、長崎は最後の被爆地となりました。私は被爆者の話を聞いたり調べたりしているだけで背筋が凍る思いでした。罪のない命が無惨にも沢山奪われ、意味のない戦いをする。それは決して許されることではないし、戦争は残酷で悲惨で、そこから得るものはなにもないと、改めて思い知らされました。

このような悲惨な出来事を二度と繰り返さず、そして絶対に忘れないためには、平和について考えるだけでなく、後世へ永遠に語り継ぎ“伝える”ことが最も重要ではないのでしょうか。唯一の被爆国として核兵器の恐ろしさや戦争をすることの無意味さ、そして原爆によってあらゆるものが失われることを全世界へ伝え、戦争のない世界にするのが被爆者の方々の願いであり、私たち若者の使命だと思っています。

今、世界では核兵器を保有している国が多くあります。私はこれを由々しき事態だと捉えています。長崎市長の鈴木史朗氏は「私達の安全を本当に守るためには、地球上から核兵器をなくすしかない。」と述べていました。核兵器は、世界中の人々の生活や命だけなく、幸せや笑顔までも奪ってしまう、存在してはいけないものだと思います。

核兵器のない世界にするため。また戦争が起こらない世界にするため。平和の旅で学んだことを沢山の人に発信していこうと思います。



平和を紡ぐ

上板橋第二中学校　８年　鈴木　美穂

長崎に原子爆弾が投下されたことで、一瞬で多くの尊い命が失われ、様々な被害がもたらされました。強力な爆風や熱気によって亡くなった方や、今でも原爆症に苦しんでいる方もいます。なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのでしょうか。そして、なぜ、長崎を投下目標の場所に選んだのでしょうか。

１つの理由は、重要な軍事拠点を破壊し、太平洋戦争を続ける日本を早期に降伏させようという考えがあったからです。長崎は、戦艦「武蔵」を建造した造船所や、兵器製造工場が集まっている日本軍の重要都市でした。また、アメリカは日本に原子爆弾を投下し、戦後、世界で優位に立ちたいと考えていました。

２つの理由は、９日の原子爆弾投下は第一目標の小倉で、長崎は第二目標でしたが、諸々の条件が悪く、長崎に投下されてしまいました。原子爆弾投下には実験的側面があり、長崎は広島や小倉と違い、２つの盆地がある狭隘な地形で実験の結果が正確に得にくい難しい都市でした。当日、小倉上空が雲で覆われていたため、原子爆弾を落とす事ができないまま、燃料不足で時間切れとなり、原子爆弾を投下する場所に向いていない長崎に変更されました。

８月３０日に、私達は、昭和館と平和祈念展示資料館を訪れました。昭和館では、戦争当時の人々の暮らしの写真や、使っていた生活用品などが飾られていました。私が印象に強く残ったものは、赤紙と千人針です。実際に赤紙を見ると、赤紙を受け取った人や家族は切ない気持ちだったと想像できます。そして、戦争に行く方が無事に帰ってきてほしいと気持ちを込めて作ったものが、千人針です。家族は無事を祈ることしかできなかったと知り、いたたまれない気持ちになりました。

平和祈念展示資料館では、語り部の吉田　勇さんに戦争当時の出来事や暮らしについて教えていただきました。吉田さんは、小学校１年生のとき学校で、軍事訓練や防空壕を掘る作業をしたそうです。現在の生活との大きな違いに驚きました。吉田さんのお話では、戦争がどれだけ悲惨で沢山の人々が苦しむということになるか改めて分かりました。実際に戦争を経験された方のお話を聞くことで、当時の出来事を鮮明に知ることができました。

私は、戦争によって奪われた平和な日常があることを改めて実感しました。私達、若い世代にとって戦争とは遠い存在だからこそ、普段から戦争と平和について考えることが大切です。そして、戦争の恐ろしさや平和の大切さを沢山の人に知ってもらい、それを次の世代に伝えていくことが必要だと思います。戦争をもう二度と繰り返さないために。

世界平和

上板橋第三中学校　８年　三浦　恵茉

私は、今回の平和についての学習会で、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典の様子や話を聞いて、これほど残酷な出来事が他にあるだろうかと思いました。長崎市長の言葉にもあった通り、原爆は一瞬にして多くの命を奪い、心や体に一生の傷跡を残しました。式典の中で、体内まで焼け、水を求めて亡くなった人々への献水が行われ、１１時２分に黙祷が行われた時、亡くなった人々の苦しみや、精神的、身体的な痛みが伝わってくるようでした。被爆者の谷口さんや工藤さんは、被爆した後も生き延びることができた人たちでした。しかし、体に傷跡や後遺症が残ったり、家族が相次いで亡くなって自分一人になってしったり、生き延びてもなお苦しみを与えられたと語っています。被爆者たちの数々の苦しみや痛みは、忘れられてはならないものだと思います。被爆者は原爆の恐ろしさをずっと訴えてきました。そのおかげで、世界で核が使われることはこの７８年間一度もありませんでした。しかし今、世界では核が戦争において敵国に対する「威嚇」として使われ、どんどん改良されていっています。今核戦争が始まったら、世界は崩壊するに違いありません。核はいかなることがあっても使用することは許されることではないと思います。もう廃絶しか道はないと訴えるべきです。世界が核の非人道性を理解し廃絶へ向かうために、唯一の被爆国である日本に住む私達は、被爆の実相を知り、理解し世界に広めていく役割があると思います。原爆が落ちたあの日を語ることのできる被爆者は年々減っています。私達が被爆者の思いを引き継ぎ、平和の文化を世界に広めていくことで、もう二度と悲劇を起こさないようにしていきたいと思います。

平和祈念展示資料館に行って、海外から引き揚げてくる人たちはとてつもない苦しさや生き辛さを負って帰ってきたとわかりました。収容所に入れられた人たちへの酷い扱いや生活の状況に、とても胸が痛くなるようでした。今日本にはそのようなことはありませんが、まだそういった事がある国もあると知ったので、皆人間が安全で健康で生きられる権利をもっと世界に広めていきたいと思います。

平和を伝え続ける大切さ

桜川中学校　８年　西村　明梨

1945 年 8 月 9 日、原爆投下。一発の核兵器がたくさんの尊い命を奪い、苦しめ、長崎に大きな爪痕を残しました。この悲惨な出来事を二度と繰り返さないために、今後、被爆者が歳を重ねいずれはいない世界になろうとも、自分の言葉で伝えるため、この「平和の旅」に参加しました。

【長崎原爆犠牲者慰霊碑平和記念式典】

記念式典では、平和について深く考える大切な機会となり、今後再び悲劇を繰り返さないために何が大切で、必要かを学ぶ事ができました。長崎が最後の被爆地であるために被爆者が原爆の体験を伝えてきた事が、原爆投下から 78 年間核兵器が使われなかった理由であり、被爆者の平均年齢が 80 歳を超え、減って行く中、私達が次の世代へこの悲惨な出来事を世界に伝えなければなりません。

そのためには、この世から核兵器を無くす他ありません。しかし、今、使用可能な核兵器は存在し、たった 1 つの爆弾がどれだけの被害をもたらすか、どれだけの人が犠牲になるか、その事を知る日本が世界へ核兵器を無くす条約、「核兵器廃絶」を訴え、被爆者の思いを私達が受け継いでいくこと、それが「平和」だと「平和宣言」を通し学ぶ事ができました。「平和宣言」の中でも私は特に心に響く言葉がありました。それは、「核戦争に勝者はいない」という言葉です。この言葉を聞いた時、私は確かにそうだと感じました。7 万 4000 人の命が失われ、その後生き残ったとしても病などに苦しむ核戦争。死をさまようような地獄。勝者などいるわけがありません。次に、被爆者代表の工藤さんからの「平和への誓い」から学んだこと、工藤さんの原爆に対する思い。それは、工藤さんが実際に体験した想像することすらつらい出来事。地球と安全を守るため、体験を伝える活動に取り組み「次の世代へ青い地球を」それが工藤さんの願いです。深く、心の重くなるような出来事だったという事を改めて感じ、その事を踏まえて今後へ平和を伝えたいという強い気持ちにとても感銘を受け、私も頑張らなければ、そう思いました。

8 月 9 日は平和を祈る大切な日であり、伝える日でもあります。そこでは、平和が何より大切で、戦争がどれだけ愚かか、「平和の尊さ、戦争の悲惨さ」を学び、二度と繰り返さないために自分の言葉で伝える事が今後に必要であることが分かりました。今回の平和の旅に参加した皆さんと戦争について一緒に学び、意見交換ができる、この貴重な体験を生かし、この思いを今後へ生かせるように努力していきたいです。これからも、引き続き「平和」について学び、いつかは実際に現地、長崎に行きその地で学びたいと思いました。

ここから伝える

赤塚第一中学校　８年　小西　結子

目前まで迫っていた平和の旅に行くことはできませんでした。３日間で体験し、体感するはずだった多くのことが目の前で消えたことは、とても悲しいことでした。しかし、私達はここで立ち止まってはいけない、そう考えました。実際に被爆地に行かなくても、現地に思いを馳せることはできる。原子爆弾や戦争について正しい知識を身に付け、他の人に伝えることもできる。平和な世の中を創るためにここでできることは、たくさんあるのです。

１９４５年８月９日、午前１１時２分。一瞬にして７万３８８４もの尊い命が奪われました。平和祈念式典で一番印象に残った言葉は、谷口稜曄さんが生前に遺した、「過去の苦しみなど忘れられつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。」というものです。今年、被爆者の平均年齢は８５歳を超えました。被爆者の方から直接話を聞くことができる時間は、決して長いものではありません。直接戦争の時代を過ごした人の叫びが聞こえなくなったら、原子爆弾の恐ろしさを忘れ、武力で人を制圧する日本になってしまうのでしょうか。そのような日本にしてはならないと私は強く思います。被爆者がいなくなっても、日本に原子爆弾が落とされ、たくさんの命が犠牲になったという事実は無くなりません。唯一の核被爆国に産まれた私達には、原子爆弾の恐ろしさを語り継ぐという使命があると思います。

式典で繰り返し使われていた言葉があります。それは「長崎を最後の被爆地に」というものです。ロシアがウクライナに対して核を使った威嚇をしています。世界中には多くの核兵器が昔から眠っています。それが今、実際に脅威を振るおうとしています。長崎の人は皆、過去に長崎に起きた惨禍が繰り返されることを望んではいません。私達は今、現地の声を世界中に届けなければならないのです。

平和が大切だということは皆が知っていて、少なくとも頭では理解していることです。しかし、世界中から戦争はなくなりません。そんな世の中で恒久平和を願うことは、「綺麗事」なのでしょうか。私は平和祈念式典を見て、恒久平和は長崎の人々にとっては綺麗事でも、決して達成し得ない理想論でもない、絶対に達成すべき目標なのだと感じました。理想論でも、全世界の人が願えば、それは実現できる。今はスマートフォンひとつで自分の意見を発信できる時代。

私はここから世界に向けて訴えます。「No war. Create a peaceful world.」

言葉と行動で平和をつなぐ

赤塚第二中学校　８年　和田　宝珠

今回の平和の旅では、たくさんの貴重な経験をすることができました。特に印象に残っていることを二つ紹介します。

【語り部さんのお話】

平和祈念資料館では語り部さんのお話を聞きました。語り部さんの吉田勇さんは実際にソ連軍の潜水艦に襲われて被害に遭われた方です。戦争中、吉田さんは小学四年生。吉田さんが避難するために乗っていた大型船を含む計３隻が襲われました。３隻のうち唯一残った第二新興丸に乗っていた吉田さんは幸いにも助かりましたが残りの２隻は海に沈没してしまいました。また、小学校一年生の頃から軍事練習を開始されたとおっしゃっていました。私は実際に戦争を体験されている方の貴重なお話を聞き、戦争の恐ろしさを改めて学び、戦争について声を出して伝えていくことの大切さを学びました。

【昭和館・平和祈念資料館】

昭和館では、千人針がとても印象的でした。千人針は、赤紙を受け取った母親が、働き手として生活を支える大切な息子や夫の無事を祈り、女性が布に一針ずつ糸で玉を結んで作ったお守りのことです。「無事に帰ってこられますように」という女性たちの願いや祈りが込められた千人針を持って戦場へ向かいました。私はこの千人針を見たとき、必ず生きて帰ってきてほしい、という女性たちの切実な思いを感じました。家族の別れは本当に悲しいものだと痛感しました。

また平和祈念資料館では、抑留者の手作りスプーンが印象に残っています。抑留者が、手に入る材料や道具を使って作ったスプーンは、生きていく上で欠かせない存在でした。また、このスプーンでいつの日か故郷に帰り、腹一杯食べられることを信じて希望をもちながら毎日生きていたそうです。これを見て私は、生きることに対する一生懸命さを感じました。辛い戦争の時代だったからこそ、負けずに生きていく姿勢に感動しました。

【最後に】

平和の旅では、戦争の愚かさと平和の尊さ、どんな状況でも生きることを諦めない強い心を学びました。二度と悲惨な戦争が起こらないよう、今回学んだことを自分の胸にしっかり刻み、言葉で伝え、行動していく決意をしました。

与えられなくても

赤塚第三中学校　８年　平松　亮人

今回の長崎平和の旅は現地に赴く事ができず、その話を聞いた当初は、実際に被爆地を訪れないと当時のことを知る事ができないと絶望感に苛まれました。しかし、現地に行けなかったからこそ、少しでも被爆した方々の気持ちを受け止め、広い世代に伝えていくために学習し、学んだことや気付いたことがあります。

【長崎平和宣言】

２０２３年度長崎市長による平和宣言を聞いて自分の中で根深く残っている点は二つあります。一つは谷口さんの「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」という言葉についてです。この谷口さんという方は１６歳の頃被爆し背中に大火傷を負った方です。現在は亡くなってしまい、結果この言葉を放ったのも生前となります。このことを聞いて感じたことは実際に今現在、原爆についての恐ろしさ、悲しみが忘れられようとしていることです。とある番組のインタビュー調査では８月１５日はなんの日ですかと聞いたところ終戦の日と答えられた人たちの割合が３割であからさまに戦争について知らない人たちが多くいる現実があります。さらになぜ知ろうとしないのかについての調査も行ったそうですがその大半が「怖くて見たくない、知りたくない」、「自分たちとは無関係である」と言っていたそうです。このことを踏まえて、谷口さんの言葉通りに原爆に対しての忘却が進行しているどころかそもそも戦争、被爆について知ろうとしていないことが分かります。だからこそ、これからの未来を担う若者、私達が平和についてもっと詳しく知り発信して行かなければならないと改めて感じ取れました。二つは市長の「被爆者は、思い出すのも辛い自らの被爆体験を語ることで、核兵器がいかに非人道的な兵器であるのかを世界に訴え続けてきました。この訴えこそが、７８年間、核兵器を使わせなかった「抑止力」となってきたのではないでしょうか。被爆者がいなくなる時代を迎えようとしている中、この本当の意味での「抑止力」をこれからも持ち続けられるかは私たち一人ひとりの行動にかかっています。」という発言についてです。自分は市長のこの意見を聞いて抑止力というものがこれからの社会でどのように移り変わって働いていくのかという不安と、自分たち若い世代が工夫して周りに発信していかなければいけないという使命感のようなものに駆られました。

最後に長崎平和の旅には行くことができませんでしたが、被爆者の方々が被爆当初、国の支援も得ず自分たちの力で生活したように、十分に支援が得られなくても伝えようとするその姿勢が核兵器廃絶に繋がると思いました。

私が感じたこと

高島第一中学校　８年　伊藤　里桜

私は78年前長崎で起きた悲劇を知るために、そしてそれを二度と引き起こさないために、伝えていくために長崎平和の旅に参加しました。残念ながら台風の影響で中止になってしまいましたが、都内の資料館に行くことになりました。

私は長崎平和祈念式典をＯＮＬＩＮＥ視聴してたくさんのことを学びました。

一つは、原爆が起きたあとにも亡くなってしまった人もいるということです。放射能により白血病やがんで亡くなる人も多かったと言っていました。当時七歳で被爆された工藤武子さんの話を聞いたときにも、御家族の方が、原爆が起きた約10年後にがんで亡くなってしまったと仰っていました。原爆は、落とされた瞬間だけでなく、その後にも苦しむ人がいます。

二つは、伝えることの大切さです。私は原爆について伝えていきたいという思いで参加したので、このことはとても心に響きました。現在被爆者の平均年齢が八十歳以上と高くなっていて、被爆者が減っています。被爆者がいなくなるのもそう遠くはありません。そうなると伝える人がいなくなってしまいます。だから『私達が伝えていくのがとても大切になる』工藤さんはそのようにも仰っていました。実際に高校生が出前授業を行っていると聞きました。二度とあの苦しみを引き起こさないために伝えることがどんなに大切か。改めて感じることができました。

今は戦争の話もニュースでよく聞くようになり、原爆が落とされる可能性があることも見ました。絶対に使ってはならない。日本を最後の被爆国に、そして次の世代に青い地球を残すために私はできる限り伝えていきたいと思います。

長崎平和記念式典の決意と平和への誓い

高島第二中学校　８年　中村　美花

【平和祈念式典に参加してみて】

私達は８月９日の長崎平和祈念式典にＯＮＬＩＮＥでの参加となりました。その式典は、悲しみという姿よりも愛という温かい姿がありました。最初、参加をしてみて美しい静かな鐘の音がしました。私はその音を聞き、とても身が引き締りました。それから、原爆死没者名簿奉安を長崎市長である鈴木史朗さんが安置しました。昨年までに奉安いたしました方々７月末までに死亡が判明した被爆者と被爆体験者は合わせて３，３１４人です。私が大人になる頃には原爆の恐ろしさを経験した方々の話をもう聞けなくなってしまうかもしれません。台風６号の影響でそんな重要な体験を得る機会を失ってしまいました。正直、原爆の恐ろしさを知らず、戦争への怒りを知れずにいる自分が何か重要なことを見逃してしまっているようで悲しいです。いつか、父と母と家族と共に長崎、広島の最後の被爆地に足を運び自分の耳で確かに平和への尊さを学びたいと思います。平和祈念式典のなかで一番哀悼の意を感じることができたのは、献水と献花でした。献水とは原爆の被害に合い、その強烈な熱と火傷によって水を必死に求めた被爆者にささやかながらも確かに美しい水があること、安らかな眠りがあることを願って行われます。その水は黒いリボンをつけ冥福を祈るように手水桶に入っており、それは確かに哀悼の姿でありながら温かみがあるのです。献花は一人一人の代表者の方々が手向けます。代表者の方々の姿は哀悼だけではありません。明るい未来をつくっていくという決意を感じました。黙祷を捧げてみて悲しい気持ちが最初に走りましたが、その気持ちより明るい未来を平和な世界をつくることを誓う気持ちの方が強くなりました。

【東京平和の旅】

東京に私は住んでおきながら東京という場所を知らずにいました。東京は美しい大きなビルが建ち並ぶ景色だけではありませんでした。戦時中、木造の家は焼夷弾によって燃やされ、爆発の音が毎日の夜、鳴り響く、そんな恐ろしい歴史をもっていたのです。人々の生活は戦時中、毎日落とされる爆弾の恐怖と配給制の限られたご飯、鉄砲などの武器に変えるための金属製品を徴収され国に統制された生活。男の人は兵役の義務があり、その妻は家を守るため子育て家事は女の仕事という、分別をして大日本帝国民としての生活を強いられていました。戦争によって安心した生活は奪われます。本来、尊いはずの命が戦争によって軽くなるのです。その戦後もまた命というものは重くならないのです。

台風６号の直撃で長崎の地に足を踏み入れることは叶いませんでしたが、平和祈念式典では多くの決意と哀悼を感じることができました。東京での平和の旅は多くの戦時中、戦後を生き抜いた昔の人々の傷や戦い、多くを知ることができました。私は平和のつどいにて平和の大切さを伝えたいと思います。

平和を祈り続ける心

高島第三中学校　８年　眞下　未華子

台風が迫る中に開催されることとなった長崎平和式典を、私は緊張してＯＮＬＩＮ配信を見ていました。なぜなら、とても厳かで大切な式典であると肌で感じたからです。私は、戦争の悲惨さや平和の尊さを事前学習で学びました。そのうえで式典をリアルタイムで見ることで、長崎の式典がいかに重要な意味をもつかを感じました。この貴重な体験を私の住む地域の方々に伝えていくことは、私の使命だと思います。最も伝えるべき大切なことを考えたときに、原爆の恐ろしさや威力を知っている被爆者の方々の声をきちんと聞き、それをより多くの人に伝え、平和の声を繋いでいくことだと思いました。式典の中で私がもっとも深く心をつかまれたのは、幼い頃に長崎で実際に被爆された方のスピーチです。

被爆者代表の工藤武子さんは、原爆が投下された８月９日、被爆地からおよそ３ｋｍ離れた自宅で、家族５人で食卓を囲んでいました。その時、強烈な閃光が走り、その異常さに庭の防空壕へ駆け込んだそうです。次の瞬間、地響きのような音が鳴り響き、工藤さんはお母さんにしがみついて恐怖に怯えていたそうです。その後、工藤さんが防空壕から出て見たのは、破壊された家の風景だったそうです。爆心地から３ｋｍも離れているにも関わらず、たった１発の爆弾が何気ない日常をこんなにも簡単に破壊してしまうのだと思い、その風景を想像して衝撃を受けました。工藤さんは、被爆後ご家族を次々に亡くされ、破壊された長崎で生活をされました。工藤さんのスピーチの中に「武力によらない平和創造の道筋を指し示し、地球と人類の未来を守るには、核兵器根絶しかないと強く訴えるべきです。」という言葉がありました。御自分の被爆体験を恨んだり責めたりするのではなく、工藤さんは地球と人類の為に言葉をくださったのです。起こってしまったことを責めるのではなく、理由を求めるのでもなく、ただただ核が無くなり争いが無くなってくれることを切に祈る言葉だと思います。人類史上でも稀にみる惨禍である長崎の原爆投下を経験されながら、工藤さんや長崎の人々は私達に平和を祈り続けることを教えてくださっているのです。

平和とは、人々が争わず傷つけ合わず、互いを尊重して生活をすることです。すなわち戦争や核が必要ない世の中だということを、私はこの学習を通して改めて感じました。平和を実現し継続するためには、一人でも多くの人が、戦争や原爆の悲惨さを学び、それらを否定していかなければなりません。私は、日本人として長崎の原爆投下について更に学び、平和を祈る心を忘れずにもち続けていきたいと強く思います。そして、このような貴重な体験をさせていただけたことに心から感謝いたします。